

紹介

国際宗教研究所編、井上順孝・島園進監修

『新しい追悼施設は必要か』

ぺりかん社 平成十六年三月 四六判 三三八頁 本体二六〇〇円

本書は、平成十三年一月十一日、国際宗教研究所主催で大正大学に於いて開催されたシンポジウム「新しい追悼施設は必要か」を元に、新たに論文・資料・データを加えて編集されている。平成十三年当時の福田内閣官房長官の下に設置された「追悼・平和記念のために記念碑施設の在り方を考える懇談会」が、宗教とは関わりの少ないメンバーで審議され、平成十四年十二月二十四日の報告書で「無宗教の追悼施設」を謳ったことが、企画開催の背景にある。言うまでもなく、「追悼・平和記念のための記念碑」を考える際、靖国神社、千鳥ヶ淵戦没者墓苑等との関わり・宗教者の意見を踏まえない論議は、実際的ではない。その意味で、神道・仏教・新宗教・キリスト教からの声を収録した本企画の重要性は高い。当日のパネリスト〔敬称略・括弧内は開催時の所属〕は、発題者に菅浩二（國學院大學日本文化研究所）、岡田弘隆（弁護士、真言宗豊山派）、澤田晃成（立正佼成会）、弓谷照彦

（創価学会）、寺尾寿芳（和歌山信愛女子短期大学）、コメントーターに中村生雄（大阪大学）、李仁子（東北大学）、司会に井上順孝（國學院大學）というメンバーで「若き宗教者の発言」を副題として行われた。発題者五人中四人が「新しい追悼施設」反対者でありながら、靖国神社・千鳥ヶ淵墓苑・追悼施設の公共性等を巡って其々の異なる意見が交わされ、コメントーター・フロアからの発言にも、公的追悼への多様な見解が見られる。また、大谷栄一「靖国神社と千鳥ヶ淵戦没者墓苑の歴史」、蓮池隆広「新国立追悼施設構想とその影響」の二論文が、追悼施設問題の歴史・現状を、今井明彦「国家が祀らなかつた戦死者」、西村明「国の弔意?」、佐藤壮広「追悼の宗教文化論」、栗津賢太「記憶の場の成立と変容」の四論文が、戦争と追悼を巡る様々な問題事例を論じ、慰霊・追悼研究の多様な考察課題を提示する。現状の当該課題を理解する際、避けては通れない一冊である。



津城寛文著

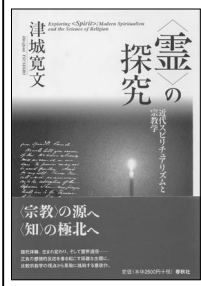
紹介

『〈霊〉の探究―近代スピリチュアリズムと宗教学―』

春秋社 平成十七年十月 四六判 二八八頁 本体二五〇〇円

本書の焦点は近代スピリチュアリズム・心霊研究と比較宗教の位置関係から〈霊〉という主題を浮き彫りにすることである。著者は宗教学の対象を「宗教と社会」、「宗教と他界」という二つの枠組みから捉えており、本書は後者を対象としている。序章から終章まで六章からなる本書では、まず序章において近代スピリチュアリズムの研究史を中心に本書の論点が「マイヤーズ問題」とスピリチュアリズムと比較宗教の関係にあることを明らかにする。続く一章では、論点のひとつであるスピリチュアリズムと比較宗教の関係をそれぞれの学問の祖であるミュラーとモーゼスの主張の類似性（諸宗教の比較の必要性、人類の普遍的な宗教の進化）といった点に着目し考察する。二章では主題のひとつである〈霊〉について近代スピリチュアリズム・心霊研究の文脈上での違いなどに迫る。その中で、スピリチュアリズムは宗教学の中でシャーマニズム研究の延長で扱う可能性があるが、〈霊〉

という主語は中でも特殊なトピックとされると筆者は主張する。三章、四章では脳死、臨死といったテーマが現代では医学的問題として取り扱われ、宗教の問題としては百年前に心霊研究において「マイヤーズ問題」として扱われているにもかかわらず知的業績が継承されていない点を指摘し、現代の臨死研究の中でのこの問題への回帰の意味を論じている。なお、〈霊〉を主題とする先行研究が、この「マイヤーズ問題」に繰り返し回帰してきたことが本書にも反映されていることを主張している。終章は近代スピリチュアリズムを神智学やオカルティズム等と対照し、重なり合うところも多いこれらを区別し、その位置を確認している。以上から、本書でも注目すべきは近代スピリチュアリズムと比較宗教の同時性、類似性を指摘した事と、宗教学において周辺化されがちな〈霊〉という主題の重要性を確認できることである。



新谷尚紀・関沢まゆみ編

紹介

『民俗小事典 死と葬送』

吉川弘文館 平成十七年十二月 四六判 四四〇頁 本体三二〇円

本書は、『日本民俗大辞典』上下〔平成十一年・十二年〕より、死と葬送に関する三・四項目を選択し、九二項目の新稿を加えて構成されている。各「項目」は、死・葬送・墓・供養・霊魂に分類され、伝統的葬儀・供養のみならず、それらの現在の状況をふまえつつ、末期医療・脳死等の現代的問題を網羅する。また、新谷尚紀氏・関沢まゆみ氏の巻頭・巻末文、各コラム、図表等は、理解を深めるための工夫がなされている。

新谷尚紀氏の巻頭文「死と葬送の歴史と民俗」には、「死と葬儀に対する伝統的な『家村・寺』の三位一体のマニュアルがくずれ、それに代わる方式が今もなお現在進行形で模索されている」現在、ますます進む「葬儀の商品化」「伝統的觀念の希薄化」「葬儀の個人化」等の実際の問題への対応が必要とされていることが明示されている。それは、死者を巡る「霊魂」の問題であり、「死と宗教」「死と社会」の問題でもある。そのために必要なのは、「伝

統的な慣習の意味を知り変化の実態を知る」ことであり、本書はそれをこそ目途としている。

また、項目数でも分かるように、「死と葬送」の形は、地域・時代・宗派等の相違によって多様であり、ますます地域性が希薄化する現代において模索すべき内容は多い。さらに、現代人の多くが病院で「死」を迎え、葬送儀礼も変化する現在、「霊魂」に対する觀念の変化も実際の問題である。併せて、今後身近に起こりうる「死」のみならず、慰霊・追悼についての項目にも目配りされている本書は、「伝統的な慣習の意味を知り変化の実態を知る」のみならず、それらを再考する機会をも提供している。全ての「生」ある人々にとって、「霊魂」「死と宗教」「死と社会」の問題が理解と考察を深めるべき対象として意識されるには、多様な「死」の形を知ることこそ縁となるに違いない。それこそ、本書を江湖にお勧めしたい由縁でもある。

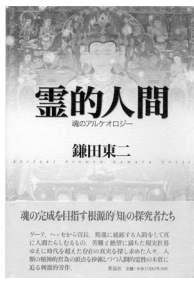


鎌田東二著

紹介

『霊的人間——魂のアルケオロジー——』

作品社 平成十八年四月 四六判 一九三頁 本体一九〇〇円



『中外日報』（連載名「宗教と文学」）および『産経新聞』（連載名「もう一つの精神史」）への寄稿を収録。『霊性の文学誌』（平成十七年）の続編だが、独立した単行本としてテーマ・内容の一貫性に配慮している。目次は「序章 アランの石の呼び声」「第一章 ヘルマン・ヘッセ―魂の魔術的変容を求めて」「第二章 ウィリアム・ブレイク―越境する想像力」「第三章 ゲーテ―親和力の神話学」「第四章 本居宣長―「もののあはれ」あるいは感情の原型構造論」「第五章 上田秋成―「妖怪」からの地平」「第六章 平田篤胤―「もののけ」のアルケオロジー」「第七章 稲垣足穂―翼とA感覚宇宙」「第八章 W・B・イェイツ―ケルト神秘主義の冒険」「第九章 ラフカディオ・ハーン―ゴーストリー・ケルトと妖怪変化・ニッポン」「終章 ケルトの呼び声―新しい普遍性を求めて」「あとがき―「モノ学」への挑戦」となっている。著者は「モノ」（モノがたり、モノのあはれ、モノづくり）について探求した結果、「日本列島文化においては「モノ」の見

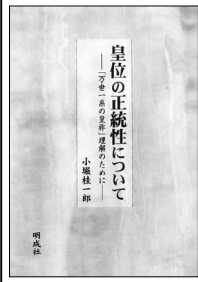
方の中に「霊性」のはたらきがあったと考えるようになった」（あとがき）という。本書のねらいは終章の次のメッセージに集約される。「混乱を極める21世紀を生き始めたわたしたちに必要な知と力とは、生の多様の中に息づき、立ち現れてくる、このような「潜在」的で「普遍的なモノ」（普遍的な古層）を見透す想像力ではないかと思う。本書で取り上げた「霊的人間」たちは、それぞれの探求と叡智的直観を通じてそのことを予感し、それぞれの時代と地域の困難を生きぬこうとした。そうした「霊的人間」たちの探求が指し示す生と思想をしかと読み解き、みずからの霊性を通して受け継ぎ、この時代の困難を自在に生き抜いていかなければならない。「モノ」を“thing”ではなく“spirituality”と訳すべき局面も視野に入れ、人間の「原型」探しの旅人達の系譜に連なり、宗教史や芸術・芸能史、文明史・文明論、存在論、認識論による「モノ学」の構築を提唱する一冊。

小堀桂一郎著

紹介

『皇位の正統性について』―万世一系の皇祚「理解のために」―

明成社 平成十八年九月 四六判 三三八頁 本体一九〇〇円



悠仁親王殿下御誕生（平成十八年九月六日）後、秋季皇靈祭日を期して発行。「遠からぬ将来に予想される皇位継承の危機に対して我等国民は如何なる備へをなすべきか」。「この難しい課題の解決に、いささかなりとも寄与を果すことができるならば――」。本篇は、こうした「悲願の如きもの」に心身を動かされ、「研究成果を積極的に世に問うて輿論喚起への一の寄与を果す」べく、平成十七年二月から十八年四月にかけて公表した論説、鼎談、講演録を集めたもの。「謂つてみれば参考資料の提供とも言へるものであるから、話題の進展が読み取り易い様にと考へて、各論策を単純に発表の順を追つて並べてみた」（緒言）。読み進めつつ要点を再確認できるので入門書に適しており、ここ数年における、著者の人的交流や思索の軌跡をつぶさに窺うことが出来るという記録的価値も意義少なからぬものがある。「皇位継承の哲学」の古典として「道理」を説いた慈円『愚管抄』と北畠親房

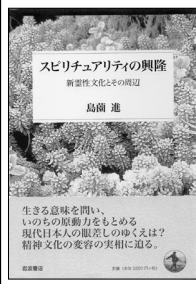
『神皇正統記』の熟読を提唱する（第三章「皇室典範に関する有識者会議」に直言す）。さらに水戸学の功績を評価し、「肇国以来第百二十五代までの天皇が固く守つて来られた継承の原則が現在将来に互つて同じくそのままに守られてあること」が「正統性の条件」であり、「日本に於ける皇位継承の重儀は、あくまでも正統性遵守の大義に則つて為されなければならない」と説く（第六章「皇位の正統性について」）。附篇として後醍醐天皇（第七章「建武中興が問う国体の本義」・昭憲皇太后（第八章「美貌の皇后の御歌と御姿」、本誌復刊第三十九号初出）・昭和天皇（第九章「昭和天皇の世紀―御生誕百年の記念年を迎へて―」に関する文章を収録。「日本の歴史において『改新』とか『維新』と言われている事業の多くは、実は歴史の記憶を始めるの方に遡り、創業者の昔を回顧するところに発しています」（第七章）など、長年の研究で培われた史眼が鏤められている。

島蘭進著

紹介

『スピリチュアリティの興隆―新霊性文化とその周辺―』

岩波書店 平成十九年一月 四六判 三四四頁 本体二八〇〇円



近年注目を集める「スピリチュアリティ」とは何か、本書はその前身から新たな宗教観として現代社会に浸透していく過程を考察している。著者は「スピリチュアリティ（新霊性文化）」の前身について、一九七〇～八〇年代に先進諸国で注目を集めた「精神世界」や「ニューエイジ運動」であると述べている。自己の精神面や内面に重点を置き、「超越的な神」ではなく「自己」に救いを求めるという考え方は、一九九〇年代、更にそれらの考えを内包した個人的宗教や文化等を含む「スピリチュアリティ」へと発展していった。九〇年代以降の「スピリチュアリティ」の浸透については、当時流行した書籍等に「グノーシス主義」が用いられたことを挙げ、「人間の中にある「本来の自己」を認識し、超越界に回帰する為に救済の「霊地（グノーシス）」を求める」という「グノーシス主義」の意識は「スピリチュアリティ」の考え方に近く、「グノーシス主義」が現代に出現したことは

「スピリチュアリティ」が社会に浸透した一端であり、「スピリチュアリティ」が如何にして現代人に関わっているかを考察している。また、「スピリチュアリティ」によって「いのち」に対する意識が見直された。「個々の魂」の尊重、即ちそれぞれの「いのち」を大切にするという考えは、「個人の意識」を重要視する「スピリチュアリティ」がもたらしたものである。「個人の意識」が発展することで一人一人が有する「いのち」に対してもまた重要であると考えられるようになった、という本書の結びは、「スピリチュアリティ」を知る上で注目すべき点であろう。さらに、「スピリチュアリティ」に現代人はどのような形で接しているかアンケート調査を行うなど、現代日本に生きる人々の「現実の声」も取り上げている。個々で生きることが重要視される現代社会において、「スピリチュアリティ」がいかに身近なものとして現代人に浸透しているか、改めて考えさせられる一冊。

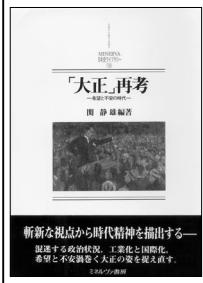
紹介

関静雄編著

〈MINERVA日本史ライブラリー18〉

『大正』再考―希望と不安の時代―

ミネルヴァ書房 平成十九年二月 A5判 三〇六頁 本体六〇〇円



故宮本盛太郎氏主催の研究会の成果を纏めたもので、「斬新な視点から時代精神を描出」（帯書）すべく、外交論三篇、吉野作造論二篇、社会変動論一篇、作家論三篇、ファシズム論一篇を収める。第一章「英米関係と東アジアにおける日本の役割意識」（宮田昌明）は、ワシントン条約締結後の東アジア国際関係史の展開を日英米の外交戦略を対照しつつ再評価する。第二章「大正外交の基調」（関静雄）は、大正期の外交思潮を国際協調主義と勢力範囲主義に着目して通観し、第三章「大正期経済外交の視点」（佐古丞）は、「通商国家」の建設を目指した「幣原経済外交」の全体像を描出する。第四章「吉野作造の二大政党論」（小山俊樹）は、日露戦争期から昭和初期までの二大政党制論の変遷を説明し、第五章「ロシア革命の大正日本への影響の一事例」（広野好彦）は、吉野作造のロシア論と民本主義・社会主義の関係論に論及、第六章「大正期の家族と国家」（木下博道）は、内縁や私生児

の出生の統計をもとに近代化に伴う社会変動を考察する。第七章「長谷川如是閑の文芸作品における「ひとりもの」の問題」（野田裕久）は、文芸作品の世界が如是閑自身の心象風景でもあったことを説明し、第八章「愛」と「政治」（金子宗徳）は、倉田百三と有島武郎の労働運動と男女関係を自我と社会の葛藤という観点から考察、第九章「大正期におけるフランス象徴主義の変容」（森誠一郎）は、大正期に青春を過ごした詩人富永太郎のフランス近代詩からの影響について精神的に考察している。第十章「イタリア・ファシズム、その日本における受容と表現形態」（山崎充彦）は、イタリア・ファシズムの指導者ムッソリーニが日本の大衆に英雄として受け取られていた事実を映画や宝塚少女歌劇などから検証する。

通説に対する問題提起をこめて、国際協調主義や民本主義の「希望」の側面と、長期大不況や政党政治の腐敗という「不安」の影を浮き彫りにする意欲的論文集。

紹介

『天下祭読本―幕末の神田明神祭礼を読み解く―』

雄山閣 平成十九年四月 A5判 二六一頁 本体二〇〇〇円



本書は江戸時代に「天下祭」と呼ばれた江戸・日本を

代表する神田明神の祭礼・神田祭に関する初の本格的な研究書である。近年、新たに発見された嘉永四年「神田明神祭礼御用留」の翻刻と解説を中心に、現代の神田祭、神輿、錦絵・千社札と祭礼、芸能の関与、祭礼番附などに関する試論「読み解き帖」、『神田明神附祭芸人名前帳』『斎藤月岑日記』などの関連資料を収録。翻刻された「神田明神祭礼御用留」は嘉永四年神田祭を運営した町名主・山本六右衛門が六月九日から十一月十三日までの九十三件の資料を時系列にまとめた記録で、祭に実際に関わった氏子、商人、芸人など様々な江戸の町人が登場する。附祭（つけまつり）に関する資料を中心に、山車、祭礼にともなう摺物・印刷費、祭礼の運営に関する寄合、町師匠の関与、名主・町火消しへの誉置などの詳細な内容を知ることができる。いずれの資料も、今まで未解明とされてきた「庶民の視点」から見た神田祭をうつし出

している。

また特に附祭に関する資料が多く見られるのが本書の特徴。附祭とは年番の氏子町により出された練物、地走踊、踊台、曳き物などのことで、毎回違ったテーマで当時の流行を取り入れた賑やかな行列であったため見物人の目を楽しませた。その代表的なものに「大江山凱陣」「大鯰と要石」などがあり神田祭の中で最も人気があった。今日において神田祭をはじめとする江戸の祭礼研究では「山車」が最も注目され多くの研究・報告が出されているが、附祭に関する研究はほとんどなかった。しかし近年、芸能史などの分野において附祭が祭礼における重要な要素として注目されつつある。本書は、祭礼研究において未だ解明されていない附祭に関する研究の先駆けとしても今後の祭礼研究の新しい視点を提示している。

紹介

高森明勅編

『日本人なら知っておきたい靖國問題』

青林堂 平成十九年六月 四六判 二八四頁 一三〇〇円

本書は、靖國神社崇敬奉賛会主催の「英霊慰霊顕彰勉強会」「青少年セミナー」における講義・討議・質疑応答等の速記録を元に再構成・再編集されている。平成十五年から平成十八年における其々の発言内容は、読者が現状の「靖國問題」を把握し、「公」の精神のあり方を再考しつつ、積極的・主体的な指針を得る縁を提示している。それは、国民としての「英霊」と現在の私達の繋がりとあり方を、歴史的伝統を踏まえて、具体的・良心的に説かれていることによる。収録内容は、高森明勅「ゼロベースから「靖國」問題を考えてみる」、大原康男「小泉首相の「靖國」参拝がもつ意味」、西尾幹二「無宗教の国立追悼施設という虚妄」、大原康男・西尾幹二・高森明勅「討議・宗教と戦争をめぐる」、百地章「戦没者の追悼と政教分離は矛盾するか」、長谷川三千子「日本を覆う反国家の思想をどう払拭するか」、百地章・長谷川三千子・高森明勅「討議・国家と神道をめぐって」、

小堀桂一郎「国民精神の支柱としての靖國の記憶」、中西輝政「靖國に始まる日本の再生」、高森明勅「問題の根源にあるもの」、小林よしのり「国を守る」とは何か」、小林よしのり・高森明勅「討議 未来への靖國神社」、「資料編」として「天皇陛下御親拝の記録（戦後）」、「皇族参拝の記録」、「総理大臣参拝の記録」、「憲法及びサンフランシスコ講和条約」となっている。

近代日本をネガティブにのみ見る歴史観で構築される靖國論に「教育混沌の元凶」を見、公的な慰霊・追悼のあり方、靖國神社の歴史と国民感情、政教分離と総理大臣の靖國神社参拝、「追悼・平和記念のための記念碑等施設のあり方」を考える懇談会」等について、様々な歴史的事実を紹介しつつ論じる本書は、すぐれてバランスのとれた内容を持つ。「靖國神社への曇りのない認識」を高める書籍として、江湖にお勧めしたい。



『三条教則衍義書資料集』(全二巻)

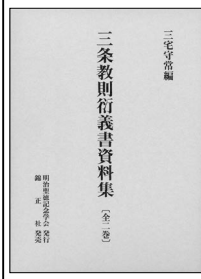
明治聖徳記念学会(錦正社発売)

平成十九年七月

A5判

一二六六頁

本体一六〇〇〇円



三条教則は明治五年四月二十八日、教部省が大教宣布運動の大綱について教導職に通過した日常生活の倫理綱領である。教導職は神道・仏教合同による運動拠点として東京に大教院、各地方に中教院、さらに各神社・寺院に小教院を置き、「第一条 敬神愛国ノ旨ヲ体スヘキ事、第二条 天理人道ヲ明ニスヘキ事、第三条 皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守セシムヘキ事」と謳われた三条教則に基づいて、日々氏子・信徒に講義説教を行った。宣教使や教導職らが大教宣布のために著した書籍は数多く、加藤玄智編『明治・大正・昭和 神道書籍目録』が「第九門 大教宣布」中の「教義」の項に掲げるものに限っても、約五百点にのぼる。明治聖徳記念学会ではこの中でもとりわけ多くの稀観文献が確認される三条教則衍義書に注目し、すでに加藤玄智博士記念学会の機関誌『神道研究紀要』において、現在國學院大學研究開発推進機構校史・学術資産センター河野博士記念室(河野省三博士記念文庫)

に所蔵するいくつかを翻刻掲載するなど、研究上重要な資料の紹介をしてきた経緯がある。これを受けるかたちで平成七年より同十七年まで、三宅守常氏の翻刻と解題による「三条教則関係資料」を、機関誌『明治聖徳記念学会紀要』において全二十六回にわたり連載した。そして平成十四年の企画・編集委員会において阪本是丸氏より一つに纏めて世に問う資料集出版の提案があり、編者三宅氏の献身的努力によつて編纂事業を執り進めてきた。時あたかも、明治天皇の慶応三年践祚より百四十年、明治五年の三条教則制定より百三十五年という時宜に、機関誌連載開始より十二年の星霜を閲し、かつ再度の資料蒐集をおこない、機関誌未掲載分を含む一〇一点もの衍義書の翻刻と解説を総合した資料集が無事上梓の運びとなった。本書が近代の神道史や仏教史だけでなく、倫理教育史、日本思想史など各分野に関する研究の発展と理解普及に多大の貢献となるよう祈念してやまない。